

W

OMEN'S

NEWS

2002 MARCH

S

PORTS

VOL. 40

F

OUNDATION



WSFジャパン設立のきっかけとなった1980年の第1回国際女性スポーツ会議
(東京・プレスセンターホール)

J

APAN

Message	WSFジャパン設立20周年を迎えて	三ッ谷洋子	2
特集	20周年記念対談	小野清子 三ッ谷洋子	3
	WSFジャパン20年の主な活動		6
	WSF Japan 女性スポーツセミナーOSAKA 開催		7
Focus	スポーツ栄養システムとトレーニング効果(下)	中村久子	7
オピニオン	変わらない男社会に異議申し立てを	山崎恵司	8
	「女性とスポーツ」の課題	飯田貴子	9
	会員のひろば		10
	事務局便り		11



WSF ジャパン設立 20 周年を迎えて

WSF ジャパンは皆様のご支援のお陰で、昨年末に満20年を迎えることができました。この機会に、WSF ジャパンを設立したキッカケと、これまでの活動の中で、特に印象に残っていることについて、取り上げてみたいと思います。

スポーツを女性の視点から考えるべきだー私がこんな考えを持つようになったのは、自分の体験が元になっています。就職や結婚・出産を通して、女性には男性にない様々な障害や問題があることを実感しました。そして、それはスポーツ界にも当てはまることだと気付きました。

1980 年秋、私が企画した第1回国際女性スポーツ会議で、パネリストとして出席した体操のチャスラフスカや陸上のアシュフォードなど、世界で活躍するトップスポーツウーマンは、競技の違いこそあれ、女性は共通の悩みや問題を抱えているということを訴えていました。

私の描いた青写真では、この会議をきっかけに「女性スポーツ振興会」を作り、プロ・アマが一緒になって、問題の解決をしていくことになっていました。しかし残念ながら、組織の中核としてお願いしようと考えていた女性たちに、主旨を理解してもらうことはできませんでした。女性が社会に対してモノを言うことは、あまり歓迎されない時代でした。

誰もやらないのなら私が

「国際会議」の翌年の81年、暮れもおしつまった頃、関心を持ってくれそうな女性たちにあらためて声をかけ、米国WSFをお手本とするWSF ジャパンの設立を決め、年明けの82年1月30日に「設立記念パーティー」を開催しました。

無名のスポーツジャーナリストが、こんなことを始めていいのだろうかと不安に思いながらも、誰も声をあげないのなら、問題に気付いた私がやるべきだと考えました。これまでの活動の詳細は、6



設立記念パーティーで挨拶
(東京・駒場エミナース)

ページ (WSF ジャパン20年の主な活動) と、作成中の「20周年記念誌」を見ていただくとして、ここでは2つのエピソードをご紹介します。

1つ目は女子柔道に関する話です。米国女子柔道界の「女子柔道をオリンピック種目へ」という運動に協力して、日本女子選手のアンケートとIOC (国際オリンピック委員会) への要望書を取りまとめました。

「0」から「1」への長い道のり

この時、全日本柔道連盟に書類を持っていったところ協力を断られ、当時、国際柔道連盟の会長だった松前重義さんのオフィスに伺い、ようやく協力を取りつけました。集まったアンケートと要望書は、各国からの書類と一緒に関係機関に提出され、4年後のソウル五輪 (88年) で公開種目、次のバルセロナ五輪 (92年) で正式種目となったのです。

2つ目は、日本体育協会とJOC (日本オリンピック委員会) への「女性役員登用」と「女性委員会設置」の働きかけです。「体協とJOCに女性役員を送る委員会」を作り、日本のスポーツを統括する両組織に対して、89年7月と90年12月の2回、「女性役員登用に関する要望書」を提出しました。翌91年3月には、体協の青木半治会長に直接お会いして、女性役員登用への協力を働きかけました。

このほか各会員の活動としては、小野清子さんが代表を務めるTOL (トータル・オリンピック・レディス会) も要望書を提出、参議院議員だった粕谷照美さんは、JOCの古橋廣之進会長に女性理事登用を進言しました。

こうした活動の結果、体協には初の女性役員として監事に高原須美子さん (後に会長)、JOCには初の女性理事・河盛敬子さんが誕生しました。「たった1人」ではありますが、「0」から「1」へのステップは、非常に大きな意味を持つものでした。

ここ数年、WSF ジャパンの会員が女性スポーツに関わる組織を次々にスタートさせています。「もっと女性を」と主張すると、「そんなことを言うのはミツ谷さんだけだよ」と長く言われ続けてきた私にとって、20年の活動から生まれた新たな兆しは、日本のスポーツ界の着実な変化を予感させます。

特集

20 周年記念対談

小野 清子
ミツ谷洋子

TOL 会長、WSF ジャパン会員
WSF ジャパン代表

今号はWSF ジャパン創立 20 周年を記念し、対談を企画しました。女性オリンピックの組織であるTOL (トータル・オリンピック・レディス会) 代表の小野清子さんと、WSF ジャパン代表のミツ谷洋子が、当時の状況を振り返りながら、女性スポーツの今後の課題について語り合いました。



米国のスポーツウーマンの行動力、組織力に圧倒された 1983 年の米国 WSF の会議
(右から小野清子さん、加藤紀生子さん=当時家庭婦人卓球連盟会長、ミツ谷洋子)

<対談の前に：ミツ谷洋子> 小野さんと初めてお会いしたのは1982年、小野さんがJOC (日本オリンピック委員会) 初の女性委員になった直後、雑誌のインタビューをお願いした時のことでした。

翌年の秋、米国のWSF (女性スポーツ財団) が初めて大きな会議を開催するというのでお誘いしたところ、指導者の立場で勉強してみたいということで、WSF ジャパンの“ツアー”に参加されました。

米国WSFは全米女性スポーツ会議を「新しい議題」(The New Agenda)と題し、11月3日～6日、ワシントンで開催しました。参加者は、基調講演に立ったWSF創立者のビリー・ジーン・キングほか、かつてのオリンピックメダリストや指導者、研究者など450人余り。米国の女性スポーツ振興の青写真を作るために、連日、熱心な討議が続きました。

現役を退いてしまうと、ほとんど社会とのつながりがなくなってしまう日本の女性たち。たとえ指導の現場に残ったとしても、男性と違って組織や周囲

の支援は無く孤軍奮闘している状況を思い浮かべ、余りの違いにため息が出ました。

4日間の会議の後に、小野さんがふともらした言葉を、私は今も忘れることができません。「日本にもこういう場があれば、依田さんは自殺しなくて済んだかも知れないわね」。

依田さんとは、東京オリンピック百メートルハードルで5位になった依田郁子さんのことです。45歳の生命を自らの手で絶ったのは、私たちが日本を出発するこの少し前のことでした。依田さんは、小野さんにとっては、東京オリンピックで選手として活躍した“同期生”です。

帰国後、小野さんは東京オリンピック当時の女子選手に声をかけ、大会から20年たった84年に「東京オリンピック・レディス」という“同窓会”を開催し、その後、全てのオリンピック出場女子選手を対象とした「トータル・オリンピック・レディス会」(TOL) を作りました。

経験を積み上げることが大切

三ッ谷 TOLの活動としては、バルセロナのオリンピックの時でしたか、出場する女子選手に体験談集などを配布していましたね。その後も続いていますか。

小 野 「われら応援団」という冊子ね。Tシャツも作って一緒にプレゼントしたんだけど、選手からはお礼状も来なかったわ。

三ッ谷 張り合いがないですね。先輩たちの体験談は、役に立つと思うのですが。

小 野 今は年に1回、冊子を作成し、フォーラムを開催しています。このフォーラムには一般の人も参加できるようにしています。



小野清子さん(右)と三ッ谷代表(参議院議員会館)

三ッ谷 講演会への講師派遣もなさっていましたよね。

小 野 みんな選手として周囲の人からやってもらうことには慣れていても、自分で責任を持って仕事をするのができなくてね。誰かがやってくれるという意識が強い。こういうことは、経験して積み上げていくことが大切です。

他にはマスターズ水泳やビーチボールバレーなどの大会に、TOLとして参加しています。

女性登用に関心のない男性たち

三ッ谷 小野さんは体操選手としては勿論ですが、現役を引退された後のご活躍は、そのまま日本スポーツ界の女性の歴史と重なります。そのキッカケは、82年にJOC初の女性委員になられたことですね。

小 野 たまたま日本スポーツ芸術協会が有名無実の組織になっていて、てこ入れするために理事長になってほしいといわれて。

三ッ谷 当時のJOCは傘下の各団体がJOC委員を出す仕組みでしたね。

小 野 そう、JOC委員になったのも、スポーツ芸術協会の理事長ということで、推薦されました。

三ッ谷 当時は各団体の重職は全て男性でしたから、そもそも女性がJOC委員に推薦されることはあり得ませんでしたね。

JOCが日本体育協会から独立してからは理事会が設置され、理事という役職ができていますが、女性理事は一向に増えません。

今は河盛さん(河盛敬子=日本なぎなた連盟理事長)が理事で、小野さんは監事でしたね。

小野さんと河盛さんが交互に理事になられていますが、何だか変ですね。女性理事2人では何かまずいのでしょうか。

小 野 定員が決まっているので、女性を増やすと男性が減ってしまうの。

三ッ谷 これだけ女性が活躍するようになったのに、ただ座っているだけの男性理事なんて、必要ありませんよ。

IOCではNOC(各国のオリンピック委員会)やスポーツ組織の女性役員の比率を、2000年までに10%、2005年までに20%という指標を発表しています。理事の改選のときに、女性の比率について検討したりはしないのですか。

小 野 今のスポーツ界を見たら、20%でも30%でもおかしくないのよ。でも、JOCの理事会で女性をもっと登用すべきだと言ってくれるのは、猪谷さん(猪谷千春IOC委員)だけ。

三ッ谷 そうですか。男性の意識は本当に変わらないものですね。

小 野 その点、今度、会長になられた竹田さんは若いので、期待しています。(注:昨年9月に急死された八木祐四郎会長の後任として、日本馬術連盟副会長の竹田恒和さんが、53歳で歴代最年少の会長

となった。)

三ッ谷 竹田さんは私と同じ大学の同期なのですが、女性に理解があることを期待したいですね。

女性でなければできないこと

三ッ谷 女性の役職といえば、オリンピックなど国際大会での「シャペロン」という仕事が、とても大切ですね。監督、コーチ、トレーナーが全て男性というケースは珍しくないですから。

小野さんは、90年の北京アジア大会で日本選手団のシャペロンをされましたね。

小 野 あの時は大変だったの。夜の8時に医務室にいったら、選手たちでいっぱい、大変な騒ぎになっていたことがありました。大腸菌がでて選手たちは下痢をして、もうてんてこ舞い。選手のカルテを出すのも追いつかないほどだった。

ピストルの選手は、相部屋ではどうしても寝られないというので、私の部屋を提供しました。選手たちがどんな状態に何に困っているのか、現場に行かないと分からない。それを自分の目で見て、お医者さんなどにフィードバックするのが、シャペロンの仕事です。

シドニーでは、金子さん(金子正子さん、シンクロナイズド・スイミングコーチ)がシャペロンでしたね。

三ッ谷 選手のコンディション調整の部分では、やはり男性指導者では務まらない部分がありますよね。

女性を使わないのは資源の無駄

三ッ谷 小野さんは国会議員として長く国政に携わっていらっしゃるわけですが、そんな経験を通して今の日本の女性スポーツが抱えている課題をどのようにお考えですか。

小 野 女性の場合、第一線で頑張った人が、その後どう生きていくかが問題よね。指導者として頑張る人もいれば、タレントとして頑張る人もいる。でも肝心なところを全て男性に任せてしまう傾向が強い。これが問題です。

でも一方ではいい女性指導者がいても、日本は生かすのが下手。私は東京都のママさんバレーの会長ですが、組織を動かす力は本当にすごい。完璧な運営をしています。

一度、是非ママさんバレーを見てください。女性に何もやらせないで、女はダメだと決め付ける人がいるけれど、それこそ人材という資源を無駄にしていると思うわ。

でも、私たち女性も吠えているだけでは能が無いわけで、ダメはダメなりにどこからその状態を切り崩していけばいいのかを、考えていくことが大切です。

三ッ谷 黙っていても、何も始まりません。男性主導の日本のスポーツ界にも、少しずつ女性の姿が見



られるようになりました。

本人の意識や実績にかかわらず、ただ「女性である」ということだけで、人数合わせのために登用されることもあるはずですよ。

数少ないそのような女性がすべきことは、意見を言う機会を持って多くの女性指導者、女性選手の代弁者でなければならないということだと思います。

今の日本の女性が置かれている環境や問題について目を向け、大きな責任を担っていることを自覚してほしいものですね。

＜小野清子さん略歴＞ ローマ、東京と2回のオリンピックに体操選手として出場。東京では団体3位。その後、夫・喬氏と日本スポーツクラブ協会を設立。86年に参議院議員初当選。「サッカーくじ」の実現などスポーツ振興のため、国政の場で活躍している。

ここではWSFジャパンの20年間(1981年～2001年)の主な活動を、会員対象の「シンポジウム・勉強会・フォーラム」、外部への広報活動である「講演」や「原稿執筆」、海外の情報収集とネットワーク作りのための「国際会議への出席」に分けて、まとめてみました。(敬称略)

<シンポジウム・勉強会・フォーラムの開催：会員対象>

シンポジウム◇「創立1周年記念シンポジウム」生沼スミ江、杉本勝子、佐藤直子、小林則子 勉強会◇各国の女性スポーツ事情 ◇女性スポーツ団体の歩みと今後の方向 ◇ジャーナリズムの中の女性スポーツ ◇女性スポーツの現状と課題 ◇スポーツ界での男女差別 スポーツフォーラム◇「女性スポーツの味方ですー男性指導者はこう思う」斉藤寛、中村良三 ◇「私とボウリング」須田開代子 ◇「なぜ山に登るのかー私の登山哲学」田部井淳子 ◇「スポーツウーマンに知って欲しいことー女性のからだとスポーツ」落合和彦、長崎宏子、土田博、田中良子 ◇「楽しく走るってどういうこと？」増田明美 女性スポーツセミナー◇「女性スポーツとマスコミ」「大阪の女性スポーツの今・昔」「結婚・出産・育児は女性選手にとってマイナスか」畑律江、来田享子、増田節子、馬淵かの子(その他、ミニ講演開などを開催)

<講演会・シンポジウム等での講演：三ッ谷洋子代表>

◇朝日新聞社公開討論会 ◇京都新聞社女性スポーツ京都会議 ◇日本レクリエーション協会シンポジウム ◇健康・体力づくり運動推進全国大会 ◇日本歩け歩け協会国際シンポジウム ◇日本陸上競技連盟女子委員会シンポジウム ◇新日本スポーツ連盟シンポジウム ◇日本体力医学会討論会 ◇日本体育学会全体シンポジウム ◇ICHPER-SD アジア女性スポーツ会議 ◇文部省生涯スポーツコンベンション ◇外務省世界スポーツコーチサミット ◇JWSシンポジウム ◇大阪女子体育連盟講演会 ◇東京都コミュニティーリーダー講習会 ◇岡山スポーツフォーラム ◇富田林市コンベンション ◇立川市婦人会館講演会 ◇兵庫・高砂市教育委員会講演会 ◇目黒区女性情報センター講演会 ◇東京学芸大学 ◇YMCA健康福祉専門学校 ◇獨協大学 ◇東海大学望星学塾 ほか

<WSF ジャパン・女性スポーツに関して原稿を執筆した新聞・雑誌等：三ッ谷代表>

スポーツグラフィックナンバー、JOC・Sports in Japan、健康と体力、体育科教育、学校体育、女子体育、社会体育、トレーニングジャーナル、パースパイア、共同通信、日本経済新聞、産経新聞、東京新聞、報知新聞、社会新報、公明新聞、Leisure & Recreationー自由時間研究、Trim Japan、スポーツのひろば、みんなのスポーツ、トライアスロン、女性展望、広告、など連載を含む計90本以上。(その他、新聞・雑誌の座談会出席や取材を受けた媒体多数。)

<国際会議への出席：三ッ谷代表及び会員>

83年 米国WSF 第1回全米女性スポーツ会議“The New Agenda”(ワシントン)
87年 米国WSF 第2回全米女性スポーツ会議“New Agenda II”(インディアナポリス)
90年 第1回世界サミット“女性とその能力の多様性”(カナダ・モントリオール)
92年 米国WSF年次総会(デンバー)
93年 国際女子体育スポーツ連盟総会(豪州・メルボルン)
94年 米国WSF20周年記念総会(ワシントン)
米国WSF表彰ディナー(ニューヨーク)
96年 ICHPER-SDアジア女性スポーツ会議(フィリピン・マニラ)
97年 国際女子体育スポーツ連盟総会(フィンランド・ラハティ)
98年 第2回世界女性スポーツ会議(ナミビア・ウィントフーク)
スカンジナビア・スポーツ医学会総会(フィンランド・ラハティ)
99年 シンガポール女性スポーツ会議(シンガポール)
国際女子体育スポーツ連盟50周年記念大会(米国・ノーサンプトン)
00年 国際女子体育スポーツ連盟理事会(ギリシャ・アテネ)
アジア・スポーツ体育学会発足記念総会(韓国・ソウル)
01年 国際女子体育スポーツ連盟総会(エジプト・アレキサンドリア)

WSF ジャパン設立 20 周年記念 女性スポーツセミナーOSAKA 開催



写真左：「男だったらもっと活躍できた」という馬淵さん(右)に対して、「プロゴルファーの生活は女性の方が楽」と増田さん(中央)

写真右：畑さん(右)は「新聞記者に女性が増えれば、女性選手をとりあげる企画や内容が違って来るはず」という。また来田さん(左)は膨大な資料を元に、木下東作が明治後期からの日本の女性スポーツ振興のキーマンとして果たした役割についてレクチャーした

「女性スポーツセミナーOSAKA」が3月2日、大阪市のクレオ大阪中央で行われました。スポーツオウエンス21(大阪女子体育連盟)との共催で、内容は大阪に軸足を置いて女性スポーツを見直すものでしたが、改めて大阪が日本の女性スポーツの草創期に、大きな役割を担っていたことを知りました。

<プログラム>●基調講演「女性スポーツとマスコミ」毎日新聞学芸部記者：畑律江



●ミニレクチャー「知ってるつもり?!大阪の女性スポーツ今・昔ーその歴史をたどる」中京大学講師：来田享子

●パネルディスカッション「結婚・出産・育児は女性選手にとってマイナスか」パネリスト：畑律江、来田享子、馬淵かの子(水泳飛び込み・元オリンピック選手)、増田節子(プロゴルファー)コーディネーター：三ッ谷洋子

Focus

スポーツ栄養システムとトレーニング効果(下)

スポーツでトレーニングの効果をよりあげるためには、栄養への配慮が欠かせません。アスリートの間で注目されているのが、米国ファーマネックス社のサプリメント(栄養補助食品)で、「アスリートのためのニュートリション」と呼ばれています。12種のサプリメントのうち、ここでは3種について効果と摂取方法をご説明しましょう。

このうち2種は体内の活性酸素を消去する作用があります。「ライフバック」と「オーバードライブ」で、いずれも、米国とカナダのオリンピック委員会公認サプリメントです。「ライフバック」は食物の重要な要素(ビタミン、ミネラル、食物栄養、抗酸化剤)がバランスよく配合され、老化や生活習慣病を予防します。朝晩の食事時に1パックずつ、コップ1杯の水で飲みます。

ファーマネックス代理店 中村久子

FAX 045-974-3944 URL <http://hisacom.jp.pharmanex.com>

2つ目の「オーバードライブ」は、アスリートのために開発された画期的なサプリメントです。運動時に大量発生する活性酸素をその場で中和し、疲労蓄積を押さえて持久力・集中力を高め、トレーニング効果を最大限に引き出します。運動の1時間前と1時間後に摂取します。

3つ目はアスリート待望の製品「コーディマックス」。中国漢方の「冬虫夏草」を原料としており、心肺機能や内臓全般に活力を与えます。1日4粒を240ccの水で飲みます。これらの製品は医薬品をはるかに凌ぎ、副作用の心配が全く無く、これまでにない革命的な栄養補助食品といわれています。詳細についてお知りになりたい方は、次のところへお問い合わせください。

オピニオン

変わらない男社会に異議申し立てを

山崎 恵司

WSF Japanが誕生して、20年がたつという。今回、原稿の依頼を受けたのは、ソルトレークシティー五輪の期間中だった。「この20年間に、日本の女性スポーツを取り巻く環境や社会的な力学は変わったのだろうか」。笑顔で閉会式を楽しんでいたスピードスケートの岡崎朋美さんや田畑真紀さんの姿をテレビで見ながら、そんな質問を自分に投げ掛け、考えてみた。しかし、いくら考えても、答えは「あまり変わってないな」だった。

変化を判断する基準の一つにしたのは、意思決定への女性の参加である。女性スポーツの先進国、米国の話を持ち出して恐縮だが、米国の女性スポーツ界は、国際オリンピック委員会（IOC）の実力者の一人であるアニタ・デフランツ前IOC副会長を送り出し、米国オリンピック委員会（USOC）に初の女性会長であるサンドラ・ボールドウィン会長を生み出した。米国では、さまざまな競技団体で女性がトップを務めることは珍しくなくなりつつある。彼女たちは、女性の利益を代表して発言するため、その団体の意思決定や政策に女性の意見が反映されることになる。

日本の場合はどうか。例がないわけではない。去年8月に亡くなった高原須美子さんが、体協とプロ野球セ・リーグの会長を歴任した。セ・リーグでは女性ファンの獲得を強調されたこともあったようだ。しかし、体協の在任中、女性選手や女性指導者の声や意見を吸い上げて、状況を改善されたというような話は聞いたことがない。ほかにも女性役員がいらっしゃるそうだが、スポーツ界の女性の利益を代表して発言されたりすることはあまりない、と聞く。

日本のスポーツ界というのは、封建的な男社会だ。年功序列、上意下達。「後輩が先輩にも申すなんてとんでもない」という雰囲気が残っている。そんなアナクロな世界だから、女性が問題提起をしたり、議論をリードしたりするのは難しいだろう。

もう一つの判断基準は、セクシャルハラスメントに対する取り組みだ。最近、日本でも男性指導者による女性選手へのセクハラが表面化して、時折、新聞などで報じられる。しかし、独断と偏見で言わせていただくなら、表沙汰になるケースは氷山の一角だと思う。日本の女性選手にとって、男性の監督あるいはコーチ

というのは、絶対的な存在ではないか。女性選手が、男性指導者の行為に異議を申し立てたり、拒否したりするというのは、並大抵の勇気ではできないはずだ。

欧米には、セクハラガイドラインを作成しているところが多いという。どういう状況や行為がセクハラに該当するのか、セクハラを受けたときはどう対応すればいいのか、などをまとめたもので、指導者と選手の双方に注意を喚起しているようだ。インターネットで、米国のWSFのホームページを見ると、セクハラや指導者と選手の恋愛関係、性的関係について、WSFの考え方、立場を説明したページがあった。

男性指導者と女性選手の間というのは、本来的にセクハラが起きやすい関係だといえる。にも関わらず、日本では、個人の責任、個人の問題とされる傾向が強いようだ。セクハラを防止するために、関係団体がガイドラインをつくったなどという話を聞いたことがない。

男社会である日本のスポーツ界に組み込まれた女性たちには、状況を変えることはできないのだろうか。いや、変えることはできる。声をあげればいいのだ。好例がある。千葉すずさんだ。2000年シドニー五輪を間近に控え、水連の代表選考を不服としてスポーツ仲裁裁判所に提訴したことは記憶に新しい。千葉さんの提訴は棄却される結果に終わり、その当時はさまざまな議論を呼んだが、残した結果は大きかった。水連の代表選考基準が分かりやすいものになった。水連だけではない。陸上など、他の競技も代表選考の透明性を高めていった。千葉さんの挑戦がなければ、こうした前進は起こり得なかったはずだ。

日本の社会には、対立や議論を避けようとする雰囲気がある。だからといって、だれも声をあげないのであれば、問題がどこにあるのか、明らかにならないし、問題を解決することは不可能になる。千葉さんのように異議申し立てをする人が出てきたら、WSF Japanは、議論に巻き込まれることを恐れずにサポートしてほしい。それが、女性スポーツを取り巻く力学を一変させ、その結果として、日本のスポーツ界を向上させることになるのだから。

〈やまざき・えいじ〉 WSFジャパン会員

オピニオン

「女性とスポーツ」の課題 ―理論・運動・施策―

飯田 貴子

この20年をふりかえって

WSF Japan 設立20周年おめでとうございます。『目で見える女性スポーツ白書』から1980年のできごとを見ると、WSF Japan 設立のきっかけとなった「第1回国際女性スポーツ会議、日本プレスセンターで開催」が記載されています。また、1981年にはIOCに初の女性委員2名が、1982年には「JOC 委員に小野清子が正式就任」されたことが新聞記事とともに掲載されています。20年を経た現在、状況はどのように変化しているのでしょうか。国際規模の女性スポーツ会議は、1994年の第1回世界女性スポーツ会議を契機に、次々と各地で開催されています。その成果を受けて、IOCには女性委員が10%を占めるようになりました。しかし、JOCではいまだに小野清子さんが監事として在任されているだけです。日本ではこのように、競技スポーツ、生涯スポーツ、学校体育の各分野における意志決定機関への女性の参入はまだまだ低いようです。

スポーツの男女平等・公平

「スポーツの男女平等・公平」には2つの含蓄があります。1つは、男性文化として生み出され発展してきた現在のスポーツにおける男女の平等と公平です。しかし、筋力やパワーが優位を占め、競技性を追求する近代スポーツは、女性は二流のプレイヤーに甘んじなければならぬという仕組みになっています。だからといって、女性の潜在的な力を開花させないというのではなく、これまで男性占有であった領域に女性が進出していくことは重要です。とともに、女性のための、ジェンダー・フリーな、さらに言えば、性や年齢や障害といった垣根を越えたオルタナティブなスポーツ文化を構築し、共有していくことが必要なのです。

理論・運動・施策

社会変革を推進するには、変革を促進するための条約や法令、理論、草の根運動の3つが不可欠です。スポーツの男女平等・公平に関して言えば、やや外圧的ですが、「男女共同参画社会基本法」や「女性差別撤廃条約」あるいは「ブライトン宣言」（第1回世界女性スポーツ会議決議文）等、施策は整備されてきています。また、運動についてはWSF Japan、NPO 法人ジ

ュースのようなNGO活動が活発化してきています。しかし、それらの活動を牽引する理論構築が不十分のようです。

日本スポーツとジェンダー研究会の設立

日本のスポーツとジェンダーに関する研究を概観しますと、体力や競技力を性別に分析したカテゴリーの研究、メディア、管理職・コーチ、競技種目や参加に関する配分的研究が多くを占めています。スポーツにおける男性の権力構造を解明するには、スポーツがどのようにして男性支配を支え、〈男らしさ〉〈女らしさ〉といったジェンダーの再生産装置としての役割を担ってきたかについての関係論的研究が必要ですが、これらの研究はまだ緒に付いたばかりです。そのため、同じ志を持つ者が集まり、この6月22日（土）大阪ドーンセンターで「日本スポーツとジェンダー研究会（仮称）設立記念第1回研究会」を開催することとなりました。

スポーツの男女平等・公平の実現をめざし、理論・運動・施策面からのアプローチを共に進めていきたいと思います。

〈いいだ・たかこ〉WSFジャパン会員、帝塚山学院大学教授、NPO法人MGLA理事 主な著書『スポーツの社会学』共著、杏林書院（1998）『目で見える女性スポーツ白書』共著、大修館書店（2001）『フェミニズム・スポーツ・身体』共訳、世界思想社（2001）



世界各地で女性スポーツの会議が開催されている
（第2回女性スポーツ会議 1998年・ナミビア）

■ 会員のひろば ■

清和洋子さん



(元姫路獨協大学教授)

WSF ジャパン設立時からの会員です。この 20 年間、公私共に様々な形で女性スポーツに関わり、その移り変わりを見てきました。その中でも一番印象深いのは、1983 年米国のワシントン D.C. で開催された「米国女性スポーツ会議」(WSF と IOC が共催)に参加し、米国女性のパワーを目の当たりにしたことです。

会議の運営は全て女性を取り仕切り、参加者の中には将校姿のさっそうとした女性や、赤ちゃん連れもいました。当時、副大統領だったブッシュさん(現大統領のお父さん)主催のパーティーも開かれました。女性スポーツの歴史に興味があって欧州のスポーツ会議に参加したことがありましたが、米国の会議はそれとは全く違っていました。質疑応答が非常に活発に、そして的確に行われていたのです。米国の女性、会議自体がとても自立しているなあと強く感じました。この会議は、スポーツが全ての女性にとってどうあるべきかを会議するものでした。

当時、日本は米国より 10 年は遅れていると言われていましたが、20 年経った今、果たして日本のスポーツ界は米国のように自立してきたのでしょうか。

中矢庸子さん



(ミズノ・スポーツ
プロモーション部)

ソルトレーク五輪期間中のサービスセンター(ホスピタリティー・センター)運営のため、開会 3 週間前に現地入りし、1 ヶ月あまり滞在していました。1994 年のリレハンメル大会からこの業務を担当して、夏季・冬季大会あわせて 5 回目になります。サービスセンターには地元ソルトレークシティの皆さんや海外から来られた方々が立ち寄ってくださいました。

ミズノが抱える契約選手、チームの中でも今回はドイツのスピードスケート陣が大活躍。獲得した 8 個のメダルのうち 7 個は女性が、しかも世界新記録を 3 つ樹立という素晴らしい記録でした。大会後、世界記録を出した 2 人の女性選手がメダルを持って報告に来てくれ、提供した新開発のスピードスケート・ワンピースのお陰で競技に集中でき精神的にもサポートをしてもらったと言ってくれました。とても嬉しかったですね。

矢島ますみさん



(明海大学助教授)

昨年話になりますが、2000 年 9 月より 2001 年 8 月まで研修で 1 年間ロンドンに滞在していました。研修期間の研究課題は、「スポーツや遊びに関する博物館学の基礎研究」。その時期は、ラッセル・クロウ主演の映画「グラディエーター(剣闘士)」が公開され反響をよんでいた時。大英博物館でも「グラディエーター展」を開催していました。(ラッセル・クロウは今年も映画『ビューティフル・マインド』でアカデミー賞の主演男優賞にきがやきましたね。)その影でひっそりと・・・ロンドン市立博物館で「1996 年、ロンドンで女性のグラディエーターのお墓が発掘された」という企画展示があったのです。女性グラディエーターの最初の試合は AD79。映画「グラディエーター」にも女性グラディエーターがチラリと出てきますね。女性の試合は、男性の試合よりかなり余興的な立場だったようですが、とても人気があったようです。でも“女性の剣闘は望ましくない”と、AD200 に禁止されたとのこと。剣闘はスポーツではないでしょうが、女性の身体活動をめぐる一つの歴史としてとても興味を持った次第です。現在は、女性のスポーツの歴史をどのように綴り、メッセージ化していくか?ということも重要な研究テーマとして取り組んでいます。

■ 事務局便り ■

機関紙のデザインを変えました

昨年度実施の皆様からのアンケート回答を元に、今号から機関紙のサイズとデザインを変更し、読みやすく工夫しました。なお、今回の機関紙発行が大変遅れましたことを、お詫びします。

20 周年記念誌作成中

現在「WSF ジャパン設立 20 周年記念誌」を作成中です。昨年度の実行委員会で検討した結果、20 年の活動の歩みをまとめることになりましたが、さらに明治時代以降の写真と資料をもとに、「女性とスポーツの歴史」を加えます。編集作業と並行して、50 枚以上になる写真の版權をクリアする作業に追われています。発行は 7 月の予定です。東京での「20 周年記念行事」(日時未定)の際に、皆様にお配りする予定です。お楽しみにお待ちください。

世界会議と「キッズじゅうどう」

今号 9 ページの「オピニオン」欄で、飯田貴子さんが「日本スポーツとジェンダー研究会」(仮称)をスタートさせると書かれていますが、この他、会員が取り組んでいる組織の活発な活動が目につきます。小笠原悦子さんが理事長を務める JWS (ジュース=スポーツにかかわる女性を支援する会)は、2006 年の第 4 回世界女性スポーツ会議の日本招致活動をしてきましたが、先ごろ熊本市で開催されることが決定しました。

また、島谷順子さんが会長の日本女子柔道倶楽部は、未経験の子どもたちに柔道を普及する「キッズじゅうどう」の全国展開を始めました。昨年度は、名古屋や金沢など 5 地域で 6 回開催しました。千葉県船橋市の飯山満小学校では、在校生 700 人中 100 人が参加して柔道熱が生まれ、閉鎖寸前だった町の柔道場が閉鎖を免れたそうです。「柔道の楽しさを伝える」という主旨が、しっかり子どもたちに伝わったようです。

エイボン オンラインチャリティに参加を

エイボン女性文化センター (WSF ジャパン団体会員)を持つエイボン・プロダクツ(株)では、女性の社会活動支援の一環として、インターネットを通じたチャリティー・プログラムを実施しています。ネット上でエイボン製品を購入する際に、「オンラインチャリティ」に参加し寄付先を指定すると、エイボンが購入金額の 3%を寄付するという仕組みです。寄付金は購入金額には加算されません。

現在の寄付先は WSF ジャパンのほか、日本赤十字社、中央共同募金会など計 8 団体です。エイボンの商品は手ごろな価格帯のものが揃っています。ご購入の際は、是非チャリティーへのご参加をお願いします。URL は以下のとおりです。

<http://www.avon.co.jp>

寄付のお礼 (3 月 31 日現在：敬称略)

以下の方々から会費納入と共に、たくさんのご寄付をいただきました。心より御礼申し上げます。ありがとうございました。

・阿江美恵子・戸塚眞佐子・井上喜久子・(社)日本エアロビックフィットネス協会・音海哲子・後藤忠弘・工藤保子・榊井映里・福田富昭・千葉吟子・松本迪子・佐々木秀幸・鈴木律子・田中良子・関美那子・島谷順子・野々宮徹・田中菊子・武江久美・伊藤澄子・吉中康子・荒川御幸・落合和彦・川淵三郎・飯田貴子・エイボン・プロダクツ「エイボン オンラインチャリティ」
(計 25 人 1 団体、39 件 102,682 円)

新入会員 (3 月 31 日現在：敬称略)

【個人会員】◇滝沢かほる(新潟県・新潟市)◇平野八重(神奈川県・川崎市)
【団体会員】東光株式会社(徳島県・徳島市)

WSF Japan News 第 40 号

発行：2002 年 3 月 発行人：三ッ谷洋子 編集：WSF ジャパン事務局

〒151-0066 東京都渋谷区西原 3-36-23-202 SPORTS 21 内

TEL: 03-3467-4360 FAX: 03-3467-5455

WSF ジャパンとは

1981年12月、米国WSF (Women's Sports Foundation=女性スポーツ財団)をお手本として設立されたボランティア団体です。プロ・アマや年齢を問わずスポーツに様々な形で携わる女性が抱える問題を解決し、女性の視点からのスポーツの研究を通じ、女性スポーツの振興を図ることを目的としています。

主な活動は「WSF Japan News」の発行、「女性スポーツフォーラム」の開催、「女性スポーツの現状についての調査・研究」、「女性スポーツに関する情報提供」などです。会員は、元選手・指導者・研究者

などのほか、マスコミ・一般企業の関係者など男女を問わず、様々な分野に渡っています。

<入会金と会費>

	入会金	年会費
・学生会員	3,000円	5,000円
・個人会員	3,000円	8,000円
・団体会員	5,000円	15,000円
・賛助会員	50,000円	100,000円

〜〜〜米国WSFについて〜〜〜

1974年、米国のトップテニス選手だったビリー・ジーン・キングが提唱して設立されたのが、非営利の女性スポーツ振興団体WSFです。発起人は、東京オリンピック陸上競技100m優勝のワイオミア・タイアスを初めとする米国のプロ・アマ一流選手や指導者、研究者など。

毎年、秋の「表彰ディナー」は、一般の人も有名選手と同席できる形式としてチケットを高額で販売するなど、様々な活動で資金を捻出し、女性スポーツの振興に取り組んでいます。

主な活動は次のようなものです。①情報サービス ②優秀選手・指導者等の表彰 ③ニュースレターの発行 ④会議、セミナーの開催、講師の紹介や派遣 などです。

(事務局: Women's Sports Foundation / Eisenhower Park, East Meadow, New York 11554
<http://www.womenssportsfoundation.org>)

女性スポーツを応援しています。



スポーツビジネス総合シンクタンク

SPORTS 21[®]